

平成 20・21 年度 教育研究課題

「今」 幼児教育の問い直しを始めよう

～あそび・生活を通して、後伸びする子どもに～

(財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

テーマ

「今」幼児教育の問い直しを始めよう

～あそび・生活を通して、後伸びする子どもに～

◆課題

- 主題1 人とかかわる力の育ち
- 主題2 3・4・5歳の生活と5歳児の育ち
- 主題3 保育の振り返り（自己評価）
- 主題4 人生はじめての学校教育としての幼稚園（幼小の接続から）
- 主題5 幼児の生活と領域
- 主題6 子育て家庭支援と2歳児保育
- 主題7 気になる幼児と障がいへの理解
- 主題8 環境と援助
- 主題9 幼稚園機能の見直し（預かり保育・保育時間・認定こども園・家庭地域社会・家庭支援・園庭開放）
- 主題10 感性・心・知的な育ち
- 主題11 幼児の健康・生活リズムと食
- 主題12 個と集団の育ち（協同）

●各地区独自の課題

主題（課題）設定の考え方

「今」幼児教育の問い直しを始めよう

～あそび・生活を通して、後伸びする子どもに～

60年ぶりの教育基本法の改正、それに伴って学校教育法や教育関連の法整備が進むなど、国の根幹を為す教育に関しての大改革が進行中である。地域環境のあり様や家庭の状況は、高度に文明が進歩し近代化されているにも関わらず、人、特に乳幼児が護られて生きるという基本的な営みまでもがゆがめられ、また都市化の中で遊び場も奪われている。ゆがんだ家庭も散見され、親のあり方そのものも危うく、一番いたいけな子どもに暴力が及ぶという悲劇があとをたたない。

乳幼児期の育ちが、それ以降の人生の質に大きな影響力を及ぼすことが、精神構造の研究や犯罪における人格のあり様などの知見によって明らかにされつつある。まさに、人間の生き方そのものが、この時代の育ちによって大きく影響を受けることを考えるとき、日々営まれる保育の一瞬一瞬の重要性をしっかりと認識しつつ、私たち幼児期の教育や家庭教育のあり方に携わる者が、人生における発達課題を見通しながら、本気で乳幼児保育の問い直しを始めなければならないと考えるのである。

具体的には、これまでとこれからの大きな主題（課題）と考えられるものを12の項目に分け、省察を試み、研究の手がかりを付加した。

- 主題1 人とかかわる力の育ち
- 主題2 3・4・5歳の生活と5歳児の育ち
- 主題3 保育の振り返り（自己評価）
- 主題4 人生はじめての学校教育としての幼稚園（幼小の接続から）
- 主題5 幼児の生活と領域
- 主題6 子育て家庭支援と2歳児保育
- 主題7 気になる幼児と障がいへの理解
- 主題8 環境と援助
- 主題9 幼稚園機能の見直し（預かり保育・保育時間・認定こども園・家庭地域社会・家庭支援・園庭開放）
- 主題10 感性・心・知的な育ち
- 主題11 幼児の健康・生活リズムと食
- 主題12 個と集団の育ち（協同）

その上に、過疎や都市化の問題など、各地区、都道府県の抱える様々な課題を抽出していただきたいと「各地区独自の課題」も設定してある。

文中に「教師」ではなく「保育者」とあるのは、今後私立幼稚園の「認定こども園」化も考えられ、より広く保育の機能を捉える必要があると判断し、あえて「保育者」という呼称を使用した。

さあ、新しい時代の幕開けである。幼児教育の無償化などが政策課題にのぼる時代でもある。幼稚園教育の約 80%を担う私たちの使命は、本気で「公的な幼児教育」の営みを振り返り、次代を担う子どもたちを、家庭と手を取りながら豊かに育てること。その大きな役割を担うことに、責任の大きさを感じます。

2007 年 7 月

全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員会

人とかかわる力の育ち

■主題設定の理由

子どもは、人生で初めて出会う学校「幼稚園」で生活の場を徐々に広げ、日々の生活の中でさまざまな人と出会い、自分を取り巻く環境に自発的な関心に向け、積極的にかかわる楽しさや難しさを経験する。

この体験はひとりでの体験だけでは十分ではなく、他者とかかわることで、社会的な面の成長のみならず、情緒や知的な面など、生きていくうえで大切な多様な人間関係を学ぶことになる。

幼児の人間関係の深まりは、友だちを意識し、心を通わせることから始まる。互いの気持ちを感じあい、思いや考えを伝え合い、理解し合うことが人間関係の深まりをもたらす。しかし、この深まりは単に仲良くあそぶことを意味するものではなく、時にはとことんぶつかりあう経験を通して互いに分かり合うという経験や、人とかかわることから生じる葛藤を乗り越えるという経験も、他者とかかわる力の質を高める。

また、こうした人間関係の深まりは、あこがれやモデリング、互いに感じ合うことで、外部の事象を自分の中に取り込むという幼児の学びの特質から、本来の賢さへも繋がることとなる。言い替えると一緒にあそぶ相手がいることが、幼児の探究心を高め、創意工夫の努力を継続させ、新しい発想を生み出す。協同で遊ぶことにより、人と協力して物事を為すことを学習して行くとも言える。

幼児が主体的に「人とかかわる力」をはぐくむためには、保育者が温かい眼差しを持ち、あるがままの幼児の姿を見守るという配慮が必要である。そこには安心や安定感からうまれてくる人への信頼感が基盤にある。さらに、幼児の心の動きに柔軟に回答できること、幼児の立場にたって一緒に過ごし、その心に寄り添いながらその幼児らしい考え方や思いを大切にし、共感し考えあうことが保育者に求められる大切なことである。

人とかかわる力を育てることは、自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性を育て、道徳性の芽生えを培うとともに、自己の存在感の礎をはぐくみ、生きる力の基礎を育てる基盤となるものであり、幼児教育ならではの重要な視点と考えられる。

【研究の手がかり】

- ①かかわりを広げ深めるために、保育者の配慮の大切さについて考える
- ②皆の中の自分という意識を高め、皆と気持ちを合わせるものの大切さを身につけるためには、どのような配慮が必要か考える

- ③場を共有することで、幼児たちは知らないうちに、他の幼児のまねをしたり、その場特有の気分や感情を共有していく。幼児一人ひとりの共感性を豊かなものにするにはどのような環境構成と援助が必要か考える
- ④多様な価値観を認め合う心情を培うためにはどのような環境が必要か考える
- ⑤幼児期特有のさまざまな攻撃性を如何に発揮し、ぶつかり合いの中で如何に調節する力をつけるか、を考える

3・4・5歳の生活と5歳児の育ち

■主題設定の理由

幼稚園における5歳児の育ちは、3歳、4歳児の時期のあそび・生活・友だちとのかかわりの経験や体験を基礎・基本とし、個と集団が相乗し合いながら、社会性・知性・情緒の発達が顕著に変化し、充実していく時期と考えられる。

この5歳児の1年の発達は人間としての成長の“一生を支える力”が根を張る特別な1年と言える。

例えば、

- イ、面白がる・・・面白がれる心は、一生を豊かに生きるための大事な心。主体的にあそぶ中で、ひとりでもあそびに向き合う面白さや、仲間と協同的にあそぶ面白さを感じている。日々の生活の中から生まれるドラマも面白がり、ユーモアの心も育っていく。
- ロ、人が好きになる・・・自分を受容し温かく、かつ秩序も的確に示し、やりたい活動を援助してくれる保育者への揺るぎない信頼感。また、心から共感し、刺激し合える仲間の存在。この保育者や仲間との暮らしの中で心から人を好きになり、社会への信頼感も増していく。
- ハ、思いやりが育つ・・・仲間と共に過ごしたり、また異年齢で共にあそぶ中で共感やつまずき、葛藤を経て愛他行動（思いやり）が育ち、優しさが育つ。特に5歳児になると自らの行動で相手に思いやりを表現できるようになる。
- ニ、協力する・・・最初は、自己中心性がぶつかり合いながらも、しだいに仲間と一緒に楽しさを感じ、仲間を求めるようになってくる。5歳児では、仲間と目的に向かって知恵を出し合い対話し協力することができるようになる。
- ホ、読解力（リテラシー）が養われる・・・園での暮らしやあそびの中から物・人・事象を総体的、想像的に読み取り理解していく力が培われる。
- ヘ、関係性がわかり、多様性を受け入れられる・・・幼稚園でのあそびや生活の中でさまざまな体験をし、物の仕組みや段取り、人との繋がりや折り合いなど、関係性について理解し学ぶ。また、さまざまな自然と触れあふ事や、障がいのある子、異年齢の友だちなど、さまざまな人と共に園生活を送ってきた中で多様性を受け入れられるようになっていく。今後、地球環境の問題の中で生きていかなければならない子どもたちたちにとって、この“関係性”と“多様性”を生活の中で感じ、学んでおくことは重要である。
- ト、希望を持って生きている・・・さまざまな人との触れ合いや、ごっこあそび、

またテレビなどから子どもたちは、消防士さんやサッカー選手になりたいなどのあこがれを持つようになっていく。年長になると、自分はコマが上手に廻せるようになりたいなど自分自身で目標をもち努力する姿も見られる。

チ、誇りや自尊心を持つ・・・ 年長の後期になると、自信を持ち胸を張って主体的にあそびや生活を進めている年長児の姿が見られる。自他の切り分けが可能になり、自分や友だちの持ち味や得意なこと、長所短所が客観的に捉えられる。そのような力の育ちから、仲間の中で互いに持っている力を認め活かしながら充実した生活を送れるようになり、仲間から認められることでより誇りや自尊心をもつようになる。

リ、真・善・美の価値観を持つ・・・ さまざまな経験や知識を通して、幼児なりに善悪が判断できたり、真・善・美に対する感性が育ってくる。

以上のように、

3歳・4歳で培われた育ちを、5歳児は“一生を支える力”として根付かせていく。これは幼稚園という幼児の特性を踏まえた環境の中で、生活やあそびを通して培っていきけるものである。この幼稚園で育った“一生を支える力”があるからこそ次への小学校の教科的な学習を学べる態度が養われるのである。

そこで、幼稚園の5歳児はどのような一生を支える力を身に付け、それは3・4歳でのどのような育ちがあったからなのか？ また、5歳児にとっての保育者の関わりはどうあったら良いかを研究し実証していきたい。

【研究の手がかり】

- ① 5歳の1年間も個と集団が関係しながら豊かな発達・成長の変化が見られる。その1年間の変化を捉え、発達の道筋をあらわしてみる。そして、それは3歳・4歳の育ちとどうつながっているのか？を考えてみる
- ② 5歳児の中の“一生を支える力”を培うために、どのような環境や援助が必要なのか保育者の役割を考える
- ③ 人とのかかわりが乏しい現代の社会生活において、3・4・5歳児が共に生活することが、豊かな心の育ちにどう寄与しているのかを探る

保育の振り返り（自己評価）

■主題設定の理由

日々の保育は、計画し、実践し、評価し、さらに、その評価を元にしながら、保育の振り返りをして、新たな計画をしていくというサイクルを通して創られていく。ここで大切なことは、保育者が、今、そこにいる幼児の理解や実態把握をどれだけ正しく行なっているかが、まず、必要であり、それに基づいた計画でなければ意味がない。つまり、最初に、「計画ありきではない」ということである。

保育者は、意識的に、幼児を細やかに見つめ、一人ひとりの理解を深めていくことを行なっていくことが求められる。そのための「保育の振り返り」を丹念にしていくことで明らかになっていくことも大きい。また、これまでの「保育の振り返り」のやり方を、見直していくことも欠かせない。

「保育の振り返り」について、特に考えたい問題としては、

- ①「保育の振り返り」は、「いつ」「どのような方法で」「どのような観点を持って」行なっていくべきなのか。
- ②それぞれの園のこれまでの「保育の振り返り」で、見直していくべきところは、どのようなことなのかを考えてみる。とりわけ、それを行なうことで、その園の保育者の資質の向上にもつながっているのかという点もあらためて捉え直していきたい。
- ③「保育の振り返り」と「自己評価」について考えてみたい。保育者自ら、保育者としての幼児へのかかわり方などの分析をしつつ、自分の得意や足りない資質、今までは気づかなかった保育の要点を、認めていけるようなプロセスを作り出す「保育の振り返りと自己評価」は、どのようなものなのかを研究していきたい。それには、ある分野だけに片寄った自己評価ではなく、保育全体を、くまなくチェックできていく評価の項目づくりにも配慮したい。

「保育の振り返り」は、これまでも、保育の現場で、それぞれの保育者が、さまざまな形で行なってきたことである。しかし、ここで、公教育としての幼稚園教育の重要な仕事のひとつとして捉え直し、保育の質を高めていくための「保育の振り返り」とはどうあるべきかを見直すと同時に、保育者としての資質向上をめざす「自己評価」としての「保育の振り返り」の在り方を考えていくことが大切である。

【研究の手がかり】

- ①保育を進めていく中での「保育の振り返り」の実際の事例研究を行なう

- ②各園の「保育の振り返り」の方法や記録を出し合って協議する
- ③「自己評価」できる「保育の振り返り」の方法や内容を研究する
- ④自分の得意不得意の洗い出しから同僚との話し合いの機会をつくり、園全体の得意不得意を考えてみる

人生はじめての学校教育としての幼稚園（幼小の接続から）

■主題設定の理由

平成 18 年 12 月、臨時国会において教育基本法の改正が行なわれた。その第 11 条に「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ・・・」とあることを受けて、学校教育法第 1 条の学校種の規定順について、小学校以降の教育と発達や学びの連続性が明確になるよう今国会で改正された。こうした背景を考えると、学校教育における幼稚園の位置づけがより明確にされ、果たすべき役割の大切さが改めて問われている。

以上のような幼稚園をめぐる変化に対応して、これから幼稚園の果たす役割を考えてみたいと思う。

学校教育の基盤といわれている幼児期の生活や学びを考える時、まず幼児教育のあそびを中心とした生活と学習を中心とする学校教育とでは、教育の内容や方法において全く異なることを確認したい。小学校以降の「学習」は、過去の文化の集積や経験を系統的に、新しい知識や技術として習得させることが中心であるのに対して、幼稚園での学びは、生活やあそびを中心としながら幼児の物事に対する興味・関心を最大限に引き出すことを大切に、自発的・主体的に物事に関わる意欲を育てながら、具体的なあそびや活動に広げていける態度の形成が幼稚園教育の学びであると解釈されている。

幼児期に体を使って十分に活動し、いろいろなものにかかわった自らの体験が、小学校以降の学習の基盤となる重要なものである。また、豊かな環境構成の中で、幼児自ら課題を見つけて取り組むことや、友だちとイメージを共有する中で力を合わせ、協同であそびを展開することなど、これからの幼稚園教育の視点としても大切なこととであると同時に、学びの連続性や将来の社会生活にとっても、不可欠であり必須の条件でもある。

【小学校教育との連続性】

幼小連携の基本は、幼児期から児童期への発達の過程を共通理解しておくことにある。幼稚園での生活やあそびを通した総合的な学びが、小学校以降の学習の基盤であることを考えて、幼稚園教育と小学校教育の目標である教育要領や、小学校の学習指導要領の内容やねらいを深く理解することが必要であり、その上に立って教育活動を工夫することが求められる。

【研究の手がかり】

- ①双方の教育を理解するための保育者、保育者間の共通研修を実施し、交流を行なう
- ②幼児が小学校入学に際し不安や戸惑いがないように、小学生との交流や小学校生活にふれる体験学習を行なう
- ③幼稚園教育の特性を示している園での事例をあげて、何がどう育っているのかを卒園児の学校生活の様子などの情報をからめながら、保育者間で分析、協議する
- ④幼稚園教育の終盤と小学校教育の初期の接続を互いに理解し、接続期の連続性が配慮された教育課程の編成を試みる

幼児の生活と領域

■主題設定の理由

現行教育要領では、幼児教育の特性を「幼稚園教育の目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うもの」と示されている。領域のねらいを達成するためには、幼児期にふさわしい生活であること・あそびを通しての指導・一人ひとりの特性に応じた指導を重要事項として掲げ、五つの領域が設定されている。

親から離れ、幼児が初めて出会う学校である幼稚園と家庭との違いは何であろうか。少子の時代にあって、その違いは核家族での生活と集団での生活である。家庭において幼児は親密な家族関係の中で生活するが、幼稚園では集団として、保育者と他の幼児に囲まれた多様な人間関係の中で生活することが大きな違いである。あそびは生活の一部であり、初めて過ごす集団で生活を共にしながら、感動を共有し、互いに影響し合い、興味や関心の幅を広げ、自分の思いや感情を伝える言葉を獲得し、表現する喜びを総合的に味わう。

領域は幼児の生活の総体をのぞくのぞき窓であり、生活空間、活動、多様な仲間、配慮された環境全体である。

幼児の活動を五領域の視点で見ると、一つひとつの領域は単純に独立しているのではなく、ひとつの活動の中に複合され相互につながり重なっているのが見えてくる。

教育要領のねらいである、心情・意欲・態度を達成するためには、さまざまな活動があり、一人ひとりの幼児に体験がある。同じ場所で同じような活動が展開されたとしても、何を獲得し、内面に何が変化し何が育っているかは、一人ひとりが異なるものである。

したがって、活動の中で幼児が何に心を揺さぶられ、興味を傾け集中しているか、幼児の姿から読みとることが大切であり、振り返り、記録することが大切な所以である。

登園から降園までの園生活の中で、その中から何が育っているのか、保育の意図やねらいとして何が育って欲しいと願うのか、それぞれの領域や活動を手がかりとして研究して行く必要がある。

【研究の手がかり】

- ①幼児期にふさわしいあそびや環境を通して育つものには、どのようなものがあるか考える
- ②領域が複合し重なり合っている幼児の活動のねらいを明確にする
- ③ねらいを達成して行くための、配慮の行き届いた適切な環境を考える

子育て家庭支援と2歳児保育

■主題設定の理由

2歳児特区が廃止され2歳児は集団の教育に馴染まないとの理由により、子育て家庭支援として実施されていくこととなった。

教育基本法の改正では、幼児期の教育と共に家庭教育という文言が盛り込まれ、教育の第一義的責任は家庭にあることが明確に定められたが、責任を押しつけるだけでは、子育て不安や虐待の問題等の現代的病巣は解決しない。さまざまな情報が氾濫し、幼児が入園前にそこまで知らなくても良いことを教えられ知っているかと思えば、おしめをとるために具体的にどうすればよいか分からないといったような家庭が珍しくない現状も散見される。幼稚園として、さまざまな形で子育て家庭支援、つまり就労支援ではない家庭教育の支えや、自分の手で我が子を育てたいという気持ちをもっている保護者に寄り添った支援を共に考えていくことが求められている。

一方、2歳児は集団教育には馴染まないとされたものの、2歳児の4月からの1年間には、母子一体感の強い年度当初の姿から、保護者や保育者に見守られる中で友だちとのかかわりを積極的に求めていく年度後半の姿まで変化は著しい。個々の1年間の育ちを見通した、「2歳児としての教育課程」を考えていく必要がある。しかし、教育課程を考えていく場合に、月齢や個々の子どもの発達段階、それぞれの家庭における関わり方が大きく異なっていることを忘れてはならない。それらを前提として、個々の発達援助と共にじっくりと集団生活の入り口に立たせることが重要であろう。

子育て中の親子を園で受け入れる担当者は、子どもの育ちを援助する環境構成等に配慮することは元より、保護者の不安に寄り添い、共に育てるパートナーとして存在することが重要であり、保護者同士にとっては仲間づくりを促すことにも配慮したい。保護者と保育者、保護者と保護者がよい関係を築いていけるよう、また、他の保護者の子どもへのかかわりを自然と見守ることができるよう、ファシリテーター（支援者・援助者）としての技術や配慮を研修し、身につけていく必要がある。

以上のことを踏まえて、保護者が子育ての喜びも悩みも共にする仲間関係を構築し、精神的に安定して子どもと向き合えるように、「親子が育つ場」としての幼稚園の役割を自覚し、子育て家庭支援と2歳児の保育を総合的に考え研究を深めたい。

【研究の手がかり】

- ①子どもの姿が大きく変化する2歳児の教育課程はいかにあるべきか
- ②自分で育てたいという思いに寄り添った、家庭教育が豊かになるような関わりや情報提供はいかにあるべきか

- ③ 2歳児の保育者として、2歳児を持つ家庭の支援者として求められる資質や配慮すべき点はどのようなものか
- ④ 保護者同士のかかわりを豊かにするための活動や留意点は

気になる幼児と障がいへの理解

■主題設定の理由

近年、障がいを持つ人への理解が深まり、多くの幼稚園においても広汎性発達障がいを中心に、障がいを持つ幼児がごく自然に受け入れられているのは喜ばしい限りである。

平成 15 年 3 月に文部科学省から出された「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」の中でも、従来対象となってきた障がいだけでなく、LD（学習障がい）、ADHD（注意欠陥・多動性障がい）や高機能自閉症などの軽度発達障がいのある幼児にも適切な対応を図ることが重要であるとされ、幼稚園においてもより一層支援体制を整備することが求められている。

幼稚園の現場実践において、配慮が必要であると考えられる幼児が年々多くなってきているのではないかと実感するが、発達障がい専門ではないので問題行動が発見されても、その行動が軽度発達障がいに起因するのか、それとも幼さや家庭の生育歴によるものなのか判断に苦しむことがたびたびある。

そのような時に障がいに対する過去の知見や知識をある程度知っているのと知らないのとでは、その幼児を理解する上でとまどいを軽減できるであろうし、その結果、その幼児の育ちにも影響を及ぼすことになる。

もちろん、常に専門機関や医療機関等と密接に連絡を取る必要があることは言うまでもない。どうすればその幼児が持っている可能性に迫れるのか、周りにいる人たちは真剣に考え、暖かく見守らなければならない。

また、障がいのある幼児に対する理解、支援は当然であるが、その幼児がクラスにいることで周りの幼児に与えるさまざまな影響や育ちの姿などについても、さらに研究する必要がある。

【研究のてがかり】

- ①さまざまな障がいについての理解促進
- ②障がい児の実態に即した保育や支援を実践するために、ケース会議やチーム保育等、具体的な指導や援助についての研究
- ③障がい児の保護者（家族）とのコミュニケーションや、他の保護者への配慮、理解促進など、保護者（家族）を支援する進め方について研究する
- ④関係専門機関との連携について研究する

⑤周りの幼児に与える影響や育ちについて研究する

※「障がい」という語句の表記について

一般的にも文部科学省においても「障害（差し障りのある害）」という語句を使用していますが、本委員会では幼児に「害」という語はなじまないという理由で、「障がい」という語句に統一しました。

環境と援助

■主題設定の理由

幼児教育の特徴は「環境を通して行なう」教育的営みであることである。しかし、その理解は幼児教育従事者でさえ十分とは言えない現状がある。例えば、遊び方が限られた大型遊具だけが園庭に設置されていたり、幼児が自ら遊びを創意工夫できにくい玩具しか用意されていなかったり、子ども自身が再構成しにくい環境であったりするなど、保育者にとって、安全だけが優先され管理しやすい環境と取り違えられていたりすることもあり、日々の保育の中に生かされているとは言えない現状がある。

保育者の指導計画のとおり幼児たちに活動を強要し従わせ、やらせてしまうことは比較的簡単なことである。しかし、環境を通して行なわれる幼児期の教育では、教育課程に基づき、子どもの育ちを看取り、個々に対する配慮の上で指導計画を立案することが大切である。幼児の成長を願う時、幼児が主体性を発揮し、自ら感じ、考え、判断し、納得し、協同しながら行動できる環境の創造によってその願いが達成されるのである。要は指示・命令によって他律的にしか動けない聞き分けの良い幼児たちを育てるのではなく、自らの良心に基づき、よく考え、周りと共存しながら生活する力が、適切な環境の中で遊びや生活を通して幼児に育ててほしいのである。

そのためには、園生活全体を振り返り、幼児たちの自発を促し、幼児たちの判断で行動できるための物的環境、空間的環境、社会的環境、自然環境がどうあるべきか解き明かしていく必要がある。

それにもまして、保育者の関わりこそが、幼児たちにとって一番大切な人的環境となることをふまえ、保育者の援助や指導のあり方、ことばがけの方法などをさぐる必要がある。

【研究の手がかり】

下記の手がかりは互いに関連し、園全体の環境の構成と捉えることができる。研究にあたっては、環境のあり方が幼児たちの成長にどうつながるのか仮説を設定し、保育の中でそれを検証し、実践を記録し振り返り、保育者集団で検討協議を重ねることで研究を深めていただきたい。

①幼児の自発を促し、自ら活動し学ぶための環境のあり方

- ・保育室・園庭など園全体の環境の構成や醸し出す雰囲気のあるあり方をさぐる
- ・思いを共有し学び合い協同することのできる環境について
- ・子どもの姿と指導計画の立案、そして環境の構成について研究する

②保育者のかかわり方と援助のあり方

- ・保育者の援助と指導のあり方について
- ・一人ひとりの幼児の内面の理解とその対応について

幼稚園機能の見直し（預かり保育・保育時間・認定こども園・ 家庭地域社会・家庭支援・園庭開放）

■主題設定の理由

幼稚園に通園する幼児の家庭の生活のあり様は、保護者の就労形態の変化などで多様化が進んでいる。さらに、地域社会でも、助け合い支え合う大人の関係が希薄になり徐々に子ども集団が消失するなど、子どもの生活する社会構造そのものが著しく変化しつつあるといえるだろう。

これまでも、私たちは幼児の生活を家庭や地域との連続性の中でとらえながら、幼稚園での生活や活動を計画し実践してきたが、それぞれの場での生活を切り離れた独立したものと捉えながら相互に連結させることに配慮する、といった意識に止まっていたといえないだろうか。

これからは、幼稚園での生活や活動が、家庭や地域での生活と密接に関連していくために、どのように位置づき、意味をもつべきなのか、といった視点で幼児の成長・発達を保障する幼稚園機能を見直す必要があるのではないかと考える。

そこで、幼稚園・家庭・地域の関係を

- (1) 1日24時間、1週、1カ月…といった時間周期の中でのとらえ。
- (2) 0歳からの乳児期、幼児期、児童期、思春期…といった発達の連続性の中でのとらえ。
- (3) 幼稚園・家庭・地域それぞれの多様性の中でのとらえ。

以上、3つの関係軸に整理し検討してみたい。

【研究の手がかり】

- ①-1. 1日24時間の中で幼稚園教育の「標準4時間」を再検討する
- 2. 家庭や地域のあり様から考えた、より望ましい預かり保育の実践について検討する
- ②-1. 未就園児とその家庭支援のあり方
- 2. 預かり保育（学童保育）を視野に入れた卒園児とその保護者との関係を検討する
- 3. インターンシップ（職場体験）や保育体験授業のあり方を検討する
- ③-1. 発達に特別な支援を必要とする幼児と家庭支援のあり方
- 2. 預かり保育以外の正課外の保育について検討する（園庭開放などのあそび支援）

感性・心・知的な育ち

■主題設定の理由

近年、身近な自然や遊び場の減少、地域・家庭環境など子どもを取り巻く様々な環境の変化が、学びに対する意欲や関心の低下、コミュニケーション能力の不足、自尊心や規範意識の不足など子どもの育ちに影響を及ぼしていると言われている。そこで今、環境を通じたあそびを中心とする幼児期の学びが重要であることをあらためて検証すべきではないかと考える。

幼児は環境とかかわり遊ぶ中で「昨日は咲いてなかったのに今日は花が咲いている!」「あっ、風が草の匂いがする」など身の回りの小さな出来事に関心を寄せ、驚きや感動、不思議さなどを感じている。また、ままごとあそびで器に盛られた砂をご飯に、草や木の葉や小石をおかずに見立てるなど、頭の中でイメージを広げ、修正を繰り返しながら思考を巡らせている。さらに友だちと共有したイメージと自らの経験をもとに記憶を再構成し、役割を演じ、生活の風景や出来事を再現して楽しんでいる。

このように幼児は、あそびを通し環境とかかわる中で身の回りの変化に気付くようになり、美しい物を美しいと感じる心や命の尊さを知り、また友だち同士のかかわりの中で葛藤体験をしながら相手の気持ちを「察する」という心が育っていく。さらに、あそびをより面白くしようと複雑化し、あそびが円滑に展開できるように決まり事や約束事を作るなど知的要素が多く組み込まれるようになってくる。それはまさしく、幼児の自発的活動としてのあそびが幼児期特有の学びであることの証であろう。

近頃は、テレビやインターネットからいくらでも情報を手に入れることができる。また、小学校教育の先取りの教育がもてはやされ、それを望む親も少なくない。しかし、いくら「知識」を覚えようともそれが実体験と結びついたものでなければ生きた「知恵」とはなり難い。だからこそ幼児にとって幼稚園での生活が、感性を磨き、豊かな心を育み、知的な育ちへと結びつくものでなければならない。

そこで、幼児の感性を刺激し、心に響きわたる知的発達を促すような生活とはどんなものであるか、また、心の育ちや知的な育ちを培う基礎となるのが感性であることを、実践事例を挙げて考えてみたい。

【研究の手がかり】

- ①幼児がどのような場面で心を動かされ、どのように感じ、自分の気持ちをどのように表しているかを考察してみる
- ②あそびの中で、自分の心に向き合いコントロールする力などは、どのような場面

で育っているのかなど、具体的な事例を挙げて考える

- ③あそびの中で幼児の知的な育ちが確認されるのはどのような場面であるか、エピソードを記述したり事例を挙げて考える
- ④あそびや生活の中で出会う心揺さぶられる出来事(驚き・不思議さ・喜び・悲しみ・心地よさなど)が心の育ちや知的な育ちに結びつくには、どのような環境構成や保育者のかかわりが必要かを考える

幼児の健康・生活リズムと食

■主題設定の理由

1、幼児期は身体が著しく成長し、基本的動きやバランス感覚、身のこなしなどが急速に発達する時期である。しかし最近の傾向としては運動能力が低下傾向にある。あそびの中で自主的、自発的、積極的に思う存分あそぶ経験が減少している。原因として考えられているのは、大人的生活様式の変化や、生活環境の変化により、生の実感を伴った生活体験としての経験が乏しくなっていることが指摘されている。そのために、幼児の健康的な生活を丁寧に見直すとともに、家庭と連携を深め、幼児に必要な体験を十分に保障し、幼児の心身の健康を保つ上で、園生活の中にそれらの環境をどのように構成したらいいのか、幼稚園の果たす役割を明らかにしたい。

さらに、少子時代において、幼児たちが地域や家庭で異年齢のあそびや、群れあそびを経験することが少なくなっている。そのような現状の中で、幼稚園が果たす役割の最も大切なことは、群れて遊ぶことを保障することは元より、運動あそびや集団あそびなどのルールのあるあそびを通して、「ぶつかり合い」「励まし合い」「協力」など、幼児自らが体感することを見守り励まし、人とのかかわり方や、豊かな心を育むことのできる時間や環境を保障することである。そのような園の生活作りや環境のあり方を考えたい。

2、家庭生活が次第に夜型になりつつあることから、幼児の生活リズムの乱れが心配される時代にもなっている。幼児の健康的な生活はどのように保たれ、守られなくてはならないか。単に早寝早起きを習慣づけるという発想ではなく、遊びの質や量など幼児の生活全体に亘って丁寧に見直すと共に、家庭生活を含め、保護者と共に基本的な生活の習慣の確立にどう取り組んでいくのか、幼稚園の役割が重要になってきている。

また平成 17 年 6 月食育基本法が制定され、教育現場における食教育のあり方も問われてきている。従来、幼稚園教育ではあまり取り上げられることがなかった給食などについても、検討が必要になった時代といえる。これらを保護者とどのように連携し、食も含めた幼児の生活環境をいかに豊かにしていくのか、幼稚園の環境の見直しや、保育者の家庭支援との連携のあり方を考えていきたい。

【研究の手がかり】

①幼児一人ひとりが達成感をもち、健康的でたくましい体を育てる環境のあり方や、保育者のかかわりを考える

- ②幼稚園でふさわしい食育の課題を考える(給食のあり方、クッキング保育や畑作りなど、さまざまな事例の交流など)
- ③基本的な生活習慣を身につけるために、家庭生活と幼稚園生活の連続性の中で、連携をどのように図るか、また父母が当たり前と考える基本的な生活習慣の見直しの機会など、積極的に発信していくべき情報について考える

個と集団の育ち（協同）

■主題設定の理由

幼稚園は「生活」を通して個々の幼児の発達を促す集団施設教育の場である。最初は集団というよりも“群れ”のような状態であったものが、「生活」を通して、やがては個々の幼児が、自己発揮しながらもお互いを認め合い、共通のイメージや目的意識、目標を共有できるようになる。さらに幼児期の出口ではその目的、目標を自己課題化してその達成、解決に向かって考えを出し合ったり力を合わせたりすることができるようになる。

その生活とは、まず時間、空間そして保育者や幼児同士の関係に自由性が必要である。自由性に恵まれた、あそびを中心とした生活の中では、偶発的な事態、事件、事象が発生する。それらが身の回りに偶発的に起こるからこそ、幼児はそれがどのようにして起きたのか、原因や「なりゆき」を理解し、周囲の他者がさまざまな反応を示すのを目にすることができる。その中で幼児は、他者のそれぞれの特性（得意、不得意、よさ、欠点など）や“人となり”“持ち味”が分かり、興味や関心が生まれ、好意を抱いたり、また逆に距離を置いたりするようになる。

こうしたお互いの認識が豊かになっていなければ、集団で意思を通わせながら、意図的な活動を進めることは不可能であろう。お互いの特性を生かして力を合わせたり分担したり、知恵を出し合い、考え合う中から生まれてくる「協同・協働的な遊びや学び」は、日常の幼児同士の多様な関わり合いから、即ち自由性のある、遊びを中心とした生活の中での体験・経験の豊かな蓄積という土壌があってはじめて芽生え、生長すると考えられる。

ここでは個と集団とを別々に捉えるのではなく、幼児期は個と集団の活動を行き来しながら、個も集団も育っていく時期であるという前提のもとに、個が充実していくことで集団が充実し、また集団が充実することで個々がさらに充実するというサイクルをどのように構築したらよいか、どのような条件整備（環境構成、指導・援助のあり方等）が必要かといったところに視点を当ててみたい。

【研究の手がかり】

- ①生活の中で幼児同士の会話（主張や協調、伝達や情報交換、教えや相談等）が豊かに生まれるような環境構成をどのように構成したらよいか考える
- ②幼児同士が、自分たちで作りに出したあそびの中で、共通の目的、目標を持った場面を捉えて、その関わり合う姿を追ってみる

- ③幼児が個の活動をしているような場面を捉えて、その充実度を観察したり、他の幼児や集団との関係がまったくないのかどうかといった点を追求してみる
- ④お互いの持ち味や得意な面を認め合い、生かし合うような場面を見つけて、その集団の育ちがどこから生まれてきたのかを探ってみる